

三章三節 社会的責任の所在

ふだん私たちが、自らの涅槃、すなわち煩惱の永遠の止滅と呼んでいるものは、個人の問題であり、個人の平安です。しかし私たちにとって本当に必要なものは、社会の涅槃より幸福な人間共同体、慈悲に満ちた社会——です。これこそが私たちの欲しているものであり、私たちはそれを実現することができます。私たちは、このような社会を実現する責任があります⁽¹⁾。

第十四世ダライ・ラマ法王

——自己という魂、あるいは精神という実体が存在する。それがこの世界における因果法則や自然法則とは全く別に、「自由」に行動を選択している。自由とは自己（魂）にのみ許された特権である。そして、そのような自由が存在するからこそ、自己はその自由のもとに選択した行為に対しての「責任」を負わねばならない。「自由」と「責任」はワンセットである。自由意志行使するならば、自己はその行動に対しての社会的責任を負わねばならない——以上のような考え方は素朴で自然なものであり、実際の社会もそのような考え方を前提として成立しているかと思う。「自己」「自由意志」「社会的責任」の三つの要素は、相互に固く結び付いた一般概念となっている。

では、仏教や本書が主張するように、「自己」「自由意志」「社会的責任」の三つの要素のうち、根幹に当たる「自己」の実体性に疑問を投げかけることは、「社会的責任」の所在を曖昧にすることになるだろうか。（モノと分離独立した）自己の実体化を拒むことは、自己が負うべき社会的責任を放棄することにつながるだろうか。それは自己が負うべき責任に対しての免罪符となるだろうか。

結論を先に言えば、「自己の明確な意志による行動の責任は、自己が負わねばならぬ」という社会的原則は覆されることはない。むしろ、本書のような立場は、今よりもさらにいっそう、行動に伴う責任の自覚を促すことになる。私たちの行動が、自分自身に与える影響、そして社会に与える影響の両方によく気づき、気づきにもとづいた責任ある行動の選択を促すようになる。

個体への情報のインプットやアウトプットが意識場に登場しないで行動に至った場合、つまり、個体の情報処理プロセスが意識場上の自己の総和的システム（五蘊）を介さずに行動に至った場合には、自己のシステムそのものは、その無意識的な反応行動プロセスにほとんど関与してはいない。例えば、無意識的に起こる反射的行動は、意識場上の自己のシステムを介してはおらず、そのシステムそのものはその反射行動のプロセスにほとんど無関係である。

しかしながら、情報のインプットやアウトプットが意識場に登場して行動に至った場合、つまり、その情報処理プロセスが自己の総和的システムを介する場合、システム自身はその意識的反応プロセスに大きな影響を与えることになる。その情報処理プロセスに十分な気づきが伴われるならば、自己のシステムそのものがその情報処理プロセスに深く関与することになる。自己のシステムを構成する過去の経験群、思考のパターン、感情、欲求、観念、信念がその情報処理プロセスに加味されることになり、瞬間毎に選択された行動に対して、システム自身が大きな影響を及ぼす。そのような条件のもとにアウトプットされた行動には、自己のシステムの特性や性質が大きく反映されている。反射ではなく、外部からの強制ではなく、システム内の健全な自由度のもとに、その総和的調整のもとにアウトプットされた行動においては、システム自身の特性がその反応結果に対して大きな影響を及ぼしており、システムはその反応結果に対する責任を負うことになる。

したがって、私たちが何かに明瞭に気づいて、強要されるのではなく十分に吟味して意思決定するならば、システムとしての自己自身が、その瞬間毎に決定される行為に対しての責任を負うことになる。自己のシステムが十分に関与して生み出された行動にはシステムの性質や特性が色濃く反映されており、システムはその行動に対しての社会的責任を担うことになる。

子供のように自己のシステムが未熟な場合、あるいはその統合性に障害がある場合のように、自己のシステムが健全で十分な機能を発揮できないときには、自己のシステムはその行為に対しての責任を免れることができるかもしれない。実際の社会通念上もそうであるかと思う。しかしながら、自己のシステムが健全で十分な機能を発揮する条件のもとに為された行動に関しては、その責任が強く問われることになる。

したがって、私たちは自分自身の行動に対して、よく気づいていなければならない。反射のような本能的で無意識的な行動を繰り返し、気づきの無い自己を伴わぬ無責任な行為に終始してはならない。過度のアルコールや薬物によって自己のシステムを麻痺させ、気づきのレベルが低下した自己責任を伴わない行動をとるべきではない。一つ一つの行為によく気づき、自己のシステムを十分に健全に関与させ、責任を伴う行動をとらねばならない。

仏教は実体としての自己を拒絶するが、それは自己から社会的責任を放棄させるものでは決して無い。むしろ、自分自身の行動をよく自覚し、責任ある行動の選択を促している。仏道の止觀の行は、ありのままの現実によく気づき、自己の本性を知る手段である。それは自己自身が引き起こす行動をよく自覚して、日常的な行動の一つ一つをありのままに知ることを促すものである。「気づきの光」は自己自身の認知行動のプロセス

の一つ一つを照らし出し、その光はこれまでの無自覚で反射的な行為から、自覚された責任を伴う行動への転換を生じさせることになる。

一つ一つの言葉や行動が自己を形成し、そして社会を形成する。私たちはそれによく気づいて自覚し、自由で責任のある行動をとらねばならない。

1 ダライ・ラマ十四世テンジン・ギャツォ「ダライ・ラマ ゾクチェン入門」宮坂宥洪(訳)、春秋社(2003)
二六五～二六六頁